

---

# 『ホラーホラー・フェスティバル～数珠繋ぎの作者たち～』 第1話

ひとやすみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

『ホラーホラー・フェスティバル』数珠繋ぎの作者たち』 第1話

### 【Nコード】

N9077A

### 【作者名】

ひとやすみ

### 【あらすじ】

小説サイトに一斉にホラー作品を投稿した作家がつぎつぎと自分の作品に沿った怪奇現象によって怪死していく!!残った作者たちは次は自分かと恐怖におびえるが……『夏ホラー』後に企画された『ホラーホラーフェスティバル』数珠繋ぎの作者たち』リレー小説第1話です。

## （前書き）

『夏ホラー』後に企画された『ホラーホラーフェスティバル』数珠繋ぎの作者たち』リレー小説第1話です。  
第2話以降もお楽しみに！

寝巻きの足に纏わりつく無数の小さな手。

たぶん私はもうすぐ死ぬ。

もともと順序だてて話すことが苦手、しかもこんな状況で、うまく説明できるかはわからない。でも、私にとって、この経緯を遺すことはどうしても必要だった。

私がたしかに正気であったことを証明するために、あるいは不本意ながら私が異常であったことを認めるために……そして、

\*

ことの始まりは、妹の帰省だった。

都会の大学に通う為、一人暮らしをしている妹が夏休みを利用して実家に戻ってきており、盆の客足も引き、普段より静けさの際だつ我が家で、ぼつりという。

「おなががいたい」

見れば、妹はお腹を抑えソファで蹲っている。

食べ過ぎ、生理、筋肉痛？

どの問いにも彼女は首を振った。痛いという箇所が、どうも下部すぎるので、母に相談すると、

「腸というより、その下？」痛むのは子宮じゃない、と母は心配そうな表情をした。

「血が出たりしてない？」

「……ちよつと」

妹のその一言で、病院で診てもらった方が良く、ということになった。

「若いからガンってことはないと思うけどさ。あんた、変な男と遊んでないだろうね？」

「ないない！」

私が運転する車の助手席で、妹は笑って否定した。

どうもあっけらかん、としている。妙に明るい彼女を尻目に、私は欠伸をした。と、いうのも、昨夜『小説』を完成させて投稿したばかりだったからだ。

大型小説サイト『小説家になろう』内で、『夏ホラー』という天沢竜哉先生が起こした企画に遅ればせながら参加させてもらった私はサイトでも有名な作者さん達が8月14日、盆に次々と凄い作品が上げられていく渦中、猛暑と高校野球萌えに苦しみながらも、なんとか締め切りの夜に投稿した。（でも一番最後だった！）

「ていうかさ、姉ちゃん、小説書いてるっしょ？」

「え」

「勝手にノーパソ見ちゃった。なんかさ、坊ってやつ」

ちなみに家族には小説を書いていることは一切喋っていないので、こういう話題はとても恥くさい。

「勝手に見ないでよ！ で、どうだった？」

坊、というのは『ぼん』と読ませる。

私が夏ホラーで投稿した作品のタイトルである。あれを読まれたなんて……でも、わざとらしく話題を変えるのも嫌だったので、感想だけは一応聞いておくことにした。

「つままないから最後まで読まなかったんだけどさ、なんか、きもかった。」

「……あ、そ」

その病院は妹が生まれた場所だというから、結構古いのだと思って  
いたが、外観はともかく内装はとても小綺麗だった。今の産婦人科  
というのは、こうでなきゃ駄目なのかもしれない。

「初診です」

保険証を受付に出して、待合室の長椅子に座る。意外と混みあつて  
いた。腹の膨らんだ妊婦もいれば、スレンダーな若い女性もいる。  
男の人はいない。

待合室の液晶テレビには韓国のドラマが映っている。妹はそうい  
うのが好きなので、いつのまにかテレビの前の席に移動していた。一  
方、私は、韓国ドラマのなんていうかベタな展開（偏見？）が苦手  
なので、×産婦人科とマジックで書かれている置きの雑誌を読む  
ことにした。困ったことに赤ちゃんが妊婦の雑誌しか置いてなかつ  
た。『愛され妊婦になるメイク』とか『妊娠線を防ぐマツサージク  
リーム』等まるで、今の私と関係のない記事ばかり。そういうして  
いるうちに、うとうとしていた。

「ねえちゃん」

腕を揺り動かされている。気が付くと、妹が困った顔で私を見てい  
た。

「きたよ。アタシの順番」

「いつてらっしゃい。気をつけてね」

「何さ気をつけてね、って！ ていうか、一緒に来てよ」

正直嫌だった。

産婦人科の検診といえば、アレだ。足を開いて座る診察台。見たく  
ない。

「呼ばれてる、早く」

無理やりに手を引かれていくと、まずは先生に状況を説明すると  
いうことだった。

女の先生だった。

「……………はい、わかりました。じゃあ、超音波で簡単に診ておき

ましようか。」

「超音波？」

「下腹に当てて診るのよ。すぐにできるわ。」

どうやらあの診察台には座らなくて良いらしい。先生は妹の腹にゼリーのような液体を塗ると、おもむろに機械を当てた。暗い画面に白い物体が映る。

「これがあなたの子宮」

双子のような丸がふたつ並んでいる。

独特のフォルム。私は、あ、と声を上げそうになって慌てて口を押さえた。

「左右対称で、綺麗ですね。変な影もないし」

妹が、感心したようにへえ〜と頷いている。

確かに形は左右対称だった。が、向かって右側のほうに何かがある。なにか、黒く蠢くものがあるではないか。

私はそれが蹲っている胎児のように見えた。

「とりあえず問題はありませんね。基礎体温つけてる？ つけてない。じゃあ、1ヶ月くらい記録してみて、もう一度病院に来てください。そのときまた様子をみてましよう」

「はい」

「あの、先生」

「お姉さん、どうしました？」

「……あの、いえ、なんでもないです。」

蹲っている胎児の影は確かに存在しているのに。二人とも何も気が付いていないみたいに、まるで見えていないみたいに振舞うのだから。

基礎体温計の代金と診療代を支払って、病院を出ると、外気の熱気に汗が吹き出た。車に乗り込むと、「なんか食べに行こうよ！」と妹は暢気に誘ってくる。

私は、妹の子宮の映像が頭から離れずにいた。

小さな、小さな、握りこぶしほどの赤ん坊がいた。確実にいた、のに……

先生が大丈夫だと言ったではないか。勝手にそう納得して、私はそれ口に出すことさえしなかったのだ。

「ねえちゃん？」

「……ちよつと寄るよ」

「へ、どこに？」

私のせいだろうか？

『坊は小さな鉄棒のような器具に、足と手首を縛られ豚の丸焼きのように吊り下げられていた。黄ばんだ涎を垂れ流し、丸く黒い瞳がじつと天井を見上げている。その黒目の端に僕が映っていた。』

私がフザケたホラーを書いたから。

愛すべき存在である赤ん坊を、あんなかたちで化け物に下げて描いたから。

「神社？」

此処は私と妹が受験するとき、おじいちゃんが手術をするとき、たびたび訪れている神社だった。

「わ、嘘」

千円札を賽銭箱に投げ込んだ私に、妹が目丸くする。いつもは５円玉だ。

「祈って」

「なにを？」

「家族のこととかいいから、とにかく自分の無事だけ祈りな」  
大げさだなあ、と妹は愚痴りながらも手を合わせる。

バチが当たったんだ。

ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。とにかく必死に祈った。本当は自分の罪悪感を軽減する為だけだったのかもしれない。

「じゃ、帰ろうか」



「もお、なんなのさ」

単純な精神構造のせいかな、現金なもので私の心は大分落ち着いていた。

「やつぱただの気のせいかな」

深夜、床のなかでパソコンの電源を入れる。

ほぼ習慣になっている行動だ。その日のことや、小説のアイディアが浮かんだら文字にしておく。

『8月15日晴れ

あいかわらず暑い。妹と産婦人科にいった。子宮の映像を見たが、それはまるで、

ひたり。

冷たい感触が足の裏に這った。

振り向いて確かめることができなかった。

体が完全に硬直している。

脂汗が吹き出る。

それは生まれてこのかた体験したことのない悪寒で、どういふわけか、自分はもう助からないな、と理解った。

ひたり、ひたり……

それは小さな柔らかい手の感触。まるで赤ん坊のような

『ふぎゃあ』

そうか。

すべてを悟る。妹じゃない。おかしいのは自分の方だったのだ。いくら祈っても無駄だったんだ。

『怖気立つような恐怖を描きたい。』

ホラー作品の執筆中、それだけを考えて数日過ごした。その妄執が

形となって実際に姿を現したのだ。魅入られたのは私の方だ。

「ぎしゃあ、ぎしゃあ」

奇妙な幼い笑い声がすぐに耳元で聞こえた。

それは私が頭の中で創造し描いた『坊』の泣き声そのものだった。

＊

頭が痛い。意識が薄れる。

ここまで打ち込み、私はあることに気が付いた。

同じ企画でホラーを描いた方たちのことである。私の作品より、もっと恐怖に満ちた悪意に満ちた作品が沢山あった。

つまり、その作品を描いた筆者たちは……

痙攣する指で『小説家になろう』を開いた。小説を読む、検索で夏ホラーと入力する。ズラリと並ぶ作品群。

私はある作品を開き、作者へメッセージを送る、をクリックしていた。

『早く逃げて』

薄れる意識のなかで送信ボタンを押した。

ああ、どうか、どうか早く一刻もはやく届きますように、と祈りながら

（後書き）

迷走第1話となりました。  
今後の展開に期待します（笑）

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9077a/>

---

『ホラーホラー・フェスティバル～数珠繋ぎの作者たち～』 第1話

2010年10月22日00時12分発行